

《電子書籍が日本半導体・電機産業に与えるインパクト》 ついに電子書籍時代が到来か？ 日本半導体のビジネスチャンス



㈱エフエーサービス 半導体事業部 技術主幹 湯之上 隆

日本でも電子ブックリーダーとして、米Amazonの「Kindle」や米Appleの「iPad」が発売された。本格的に電子書籍時代が到来するのだろうか？ 1455年にグーテンベルクが発明して以来、500年以上の歴史を持つ紙の印刷技術が減じるのか？ また、出版不況の真ただ中にある日本出版業界には、どのような影響があるのだろうか？ さらに、世界の中で存在感を喪失しつつある日本半導体・電機産業にとって、ビジネスチャンスはあるのか？ 本稿では、電子書籍が及ぼす日本の諸産業へのインパクトを論じる。

日本出版業界の栄枯盛衰

図1に、日本における出版販売額の推移を示す。1955年以降、出版販売額は右肩上がりに増大し、見事な成長曲線を描いている。ところが、96年の2兆6000億円をピークに、一転して減少する。その流れは最早止めようがないように見える。このような（美しい？）グラフは、日本のDRAM世界シェアの推移以外に、筆者は知らない。

出版販売額の推移と符合し、出版社数も97年から一気に減少する（図2）。半導体業界誌においても昨年から今年にかけて、「日経マイクロデバイス」が休刊し、「Semiconductor International 日本版」が廃刊となり、「Semiconductor FPD World」を出版していたプレスジャーナル社が倒産したことは記憶に新しい。

ところが、出版販売額も出版社数も減少する中、新刊書籍数は97年以降も増大している（図3）。驚

くべきことに、2005年以降は、1年に7万6000点以上の新刊書籍が出版されている。平均で1日当たり、200冊以上の計算になる。つまり、日本出版業界は、多産多死の状況にあると言えるだろう。

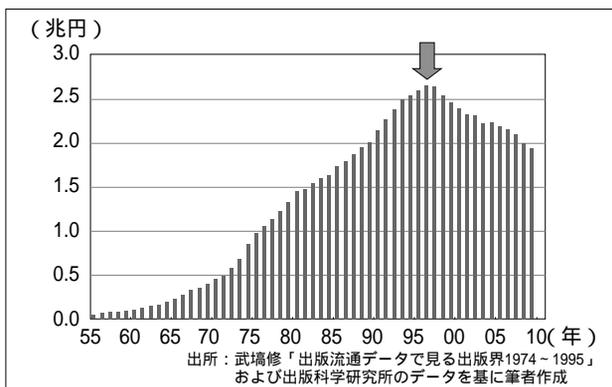


図1 出版販売額の推移（書籍および雑誌の合計）

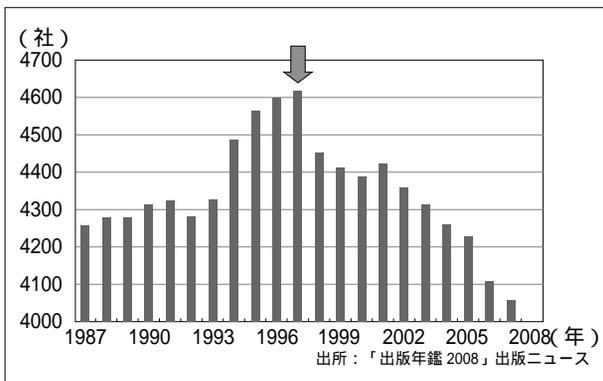


図2 出版社数の推移

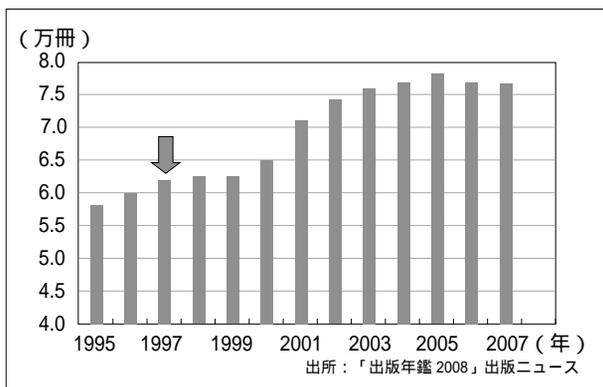


図3 新刊書籍数の推移

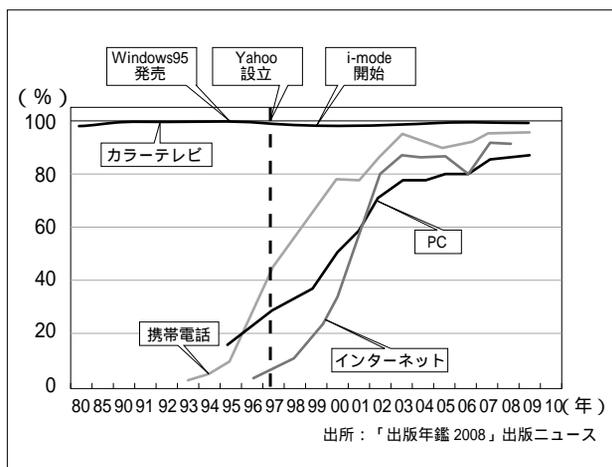


図4 カラータブ、携帯電話、PC、インターネットの普及率

出版不況の原因は何か？

このように、日本出版業界は96～97年を境に、これまで経験したことの無い不況に直面している。その不況をもたらした原因はどこにあるのか？

新聞や雑誌などでは、80～90年代にかけて、「TVなどの各種メディアのせいで、若者の活字離れが進んだ」、「(幼少および高齢者を除く)日本の人口減少が原因だ」などの意見が定説となっている。筆者は、これらの定説に賛同できない。まず、少なくとも96年までは、出版販売額が単調増加しているのである。この途中過程で“活字離れが進んでいる”とする根拠はない。

また、図4を見ると、80年以降カラータブの普及率は99%を超えている。従って、TVが出版不況の原因になったということも考えにくい。

96～97年に何が起きたのか？

では、真の原因は何か？出版販売額および出版社数がピークアウトする96～97年に、何が起きたのか？

図4を見ると、97年に携帯電話の普及率が40%を超える。また、PCおよびインターネットの普及率は、それぞれ30%と7%に過ぎないが、その後、どちらも急速に拡大していく。この背後には、95年にWindows95が発売されたこと、96年にYahoo Japanが設立されたこと、99年にi-modeサービスが始まったことなどがある。

つまり、これまで紙の書籍や雑誌に頼っていた情報源が、携帯電話やインターネットなどの電子媒体に移行していった。この影響が顕著に現れ始めたのが、96～97年であったのだろう。

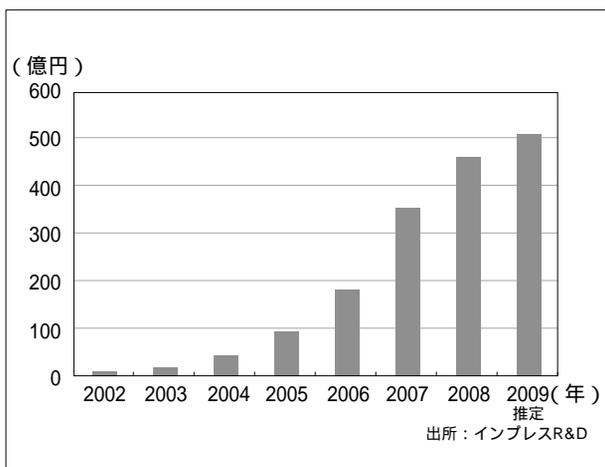


図5 電子書籍市場規模の推移

このように、情報源が紙媒体から電子媒体に移行するパラダイムシフトが起きた。にもかかわらず、97年まで右肩上がりに成長してきた日本出版業界は、そのパラダイムシフトに対応できなかった。これが出版不況を招いた最大の原因である。

電子書籍市場の推移

電子書籍市場の推移を図5に示す。2002年以降、電子書籍市場が立ち上がり始め、年々、増大していることがわかる。この電子書籍は、主として携帯電話やPC向けのコンテンツであり、「Kindle」や「iPad」用のものは含まれていない。従って、今後、KindleやiPadが普及すれば、電子書籍市場が急拡大する可能性もある。

出版不況は起きていない？

出版に対する英語“Publish”には、“公にする”、または、“発表する”という意味がある。つまり、紙媒体であれ、電子媒体であれ、公表されたものは、出版されたと言っていい。

そこで、図1に示した紙媒体の出版市場と、図5に示した電子媒体の出版市場を足し合わせた総合出版市場の推移グラフを作ってみた(図6)。すると、96～2000年にかけて、若干の減少はあるものの、2兆4000億円前後で概ね一定と見なすことができる。さらに、2010年以降は、KindleやiPadの影響で電子書籍市場が急拡大すれば、総合出版市場は飛躍的に増大していくだろう。

結局、“出版”を正しく広義に解釈すれば、出版不況など起きていないのである。単に、出版媒体(の一部)が、紙から電子に移行しただけの話である。

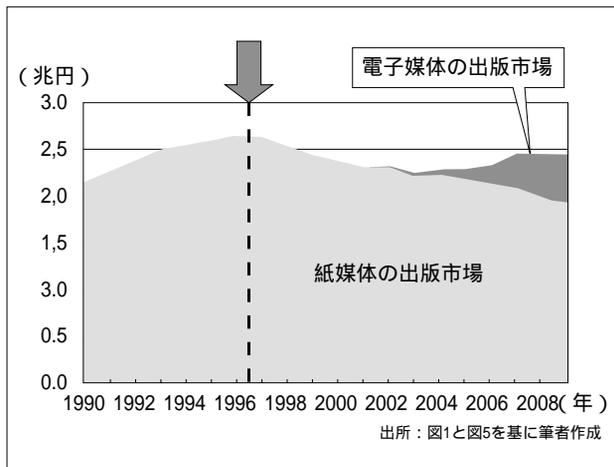


図6 紙媒体と電子媒体の出版市場の合計

電子書籍ビジネスの行方

紙媒体の出版がゼロになることはないだろう。しかし、紙媒体の出版市場が縮小し、電子媒体の出版市場が増大する流れは止まらない。にもかかわらず、日本出版業界の電子書籍への対応は鈍い。特に、大手出版社は、書店に対して値段変更を許さず定価販売を義務づける“再販制度”にぬくぬくと庇護され、信じられないほどの高給を維持してきた。このような既得権益を守るために汲々としており、電子書籍への積極的な対応が遅れている¹⁾。過去の産業の歴史を紐解いても、世の中のパラダイムシフトに対応できない産業は淘汰される運命にある。図1に示した出版社数の減少が、その一端を示している。

電子書籍ビジネスは、図7に示したように、一種のクラウドコンピューティングと理解することができる²⁾。すなわち、インターネット上のどこかの“雲”にある電子書籍コンテンツを、PC、携帯電話、またはKindleやiPadなどの電子ブックリーダーなどにより、ダウンロードして入手する。

このプラットフォームを制圧したものが、電子書籍ビジネスを制する。日本には、“日本語”という城壁があるため、米国など外国からの侵略を受けにくい。従って、日本の電子出版ベンチャーが覇権を握る可能性が高い。とは言っても、もたもたしていたら、米Appleや米Googleに攻め込まれてしまうだろう。

日本電機業界と日本半導体業界への期待

一方、日本電機業界および日本半導体業界にと

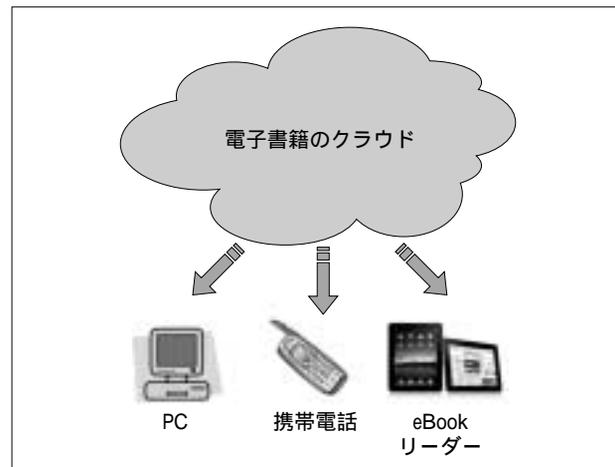


図7 電子書籍の原理

っては、どのようなビジネスチャンスがあるのだろうか？ 筆者も、KindleとiPadを手にとってみたが、大き過ぎ、重過ぎて、日本人およびアジア人には馴染まないような気がする。これは、あくまで欧米人仕様の電子ブックリーダーという印象を持った。電子機器としての電子ブックリーダーの戦いは、まだ始まったばかりであり、日本電機メーカーにも大いにチャンスがある。

また、半導体業界にとっては、まだ規模は小さいとは言え、電子ブックリーダー用という新たな市場が創造された。すなわち、ビジネスチャンスが広がったと言える。

ただし、iPadの半導体は、DRAMだけでなくプロセッサも、韓国Samsung Electronicsが製造しており、一歩先を越されてしまった³⁾。しかし、電子ブックリーダーとして、iPadが世界の覇権を握るかどうかは、まだわからない。

筆者としては、日本電機業界が世界市場で存在感のある電子ブックリーダーを開発し、日本半導体業界がそのプロセッサやメモリの世界シェアを獲得することを期待したい。少なくとも、日本語の電子書籍を、韓国製半導体が入っている大きくて重い米国製の電子ブックリーダーで読みたいとは思わない。

参考文献

- 1) 前田壘：紙の本が減びるとき？、青土社（2010）
- 2) 岡嶋裕史：アップル、グーグル、マイクロソフトクラウド、携帯端末戦争のゆくえ、光文社（2010）
- 3) 日経エレクトロニクス（2010.6.14）pp.61-70